

令和3年度 学校関係者評価報告書

評価点

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた(90%~100%)	A	とても適切である
B	達成できた(80%~90%)	B	概ね適切である
C	一部達成できなかった(50%~80%)	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった(0%~50%)	D	適切でない
		E	判定できない

学校(園)名:広島大学附属三原学校園

分野	重点目標 (評価項目)	年度計画(中期計画・ 中期目標)との関連性	具体的方策	成果指標・判断基準	自己評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
					達成状況, 改善策	評価	意見・理由	評価	
十二年間一貫教育の推進と全国への発信	異校種間交流の充実により、異校種の文化を尊重し、それぞれの教育の特徴を理解して、自らの教育を改善する。	<p>幼小中一貫カリキュラムを実施することにより全ての教員が、幼小接続及び小中接続カリキュラム・マネジメント力を更に向上させ、校種をまたいだ子どもの見取りの仕方を学び、実践に活かす。</p> <p>研究開発学校として研究・実践を全国に発信するとともに、各地域からの視察を積極的に受け入れ、広域にわたって、今後求められる教育研究のありかたを発信する。</p>	<p>①校種をこえた乗り入れ保育・授業の実施 ②校種をこえた合同保育・合同授業の充実 ③校内授業研究会の規模の拡大 ④学部附属共同研究への応募の拡大 ⑤学力向上の取組</p>	<p>① 小学校教員が、保育を10回以上、中学校教員が小学校6年生に対して年間総時数18時間以上(各教科2時間以上)実施する。 ② 幼小の保育・授業参観を年6回以上、小中の合同授業を年間総時数20時間以上実施する。 ③ 幼小教員による合同カンファレンスを年4回以上、小中学校教員が参加する授業研を年6回以上実施する。 ④ 学部附属共同研究に4件以上採択される。 ⑤ (小)漢字検定を全校児童の40%以上(2回の合計の延べ人数)が受検する。総合学力調査において、目標値のオールクリア、達成率の85%以上、A-D層の差が40以内になる。総合学力調査の1回目に見られた課題が、2回目で改善傾向となる。 (中)全国学力調査の全国平均に対して16ポイント以上の結果を得る。9年生の実力テストの平均を380点以上・平均200点以下を4名以下とする。数学検定で3級以上の生徒を35名以上とする。広大附属福山高校、広大附属高校等への進学者を合計15人、国公立立高校難関校への進学者を55名以上とする。</p>	<p>①②③幼小中一貫教育の充実のためには各所属の教員の交流や乗り入れ保育・授業、合同保育・授業が欠かせない。また、授業研究や反省会、研修会の参加者の範囲の拡大も欠かせない。しかし、本年度6月後半から8月、1月から2月にかけて新型コロナウイルス感染症の拡大があった。特に後半はこれまでにない速さと規模で感染拡大となり、園児・児童・生徒・教員の健康を守るために計画をやむなく中断した。そのため、幼小教員の合同カンファレンス以外はほとんど実施できず、低い評価となった。④学校園全体で3件の採択であった。⑤(小)漢字検定受検者については67%を超えるという高いレベルで目標を達成できた。そのほかの学力調査については令和2年度3月期と比べ課題を解決することができた。(中)全国平均以上であったが、国語、数学ともわずかに目標値に達しなかった。9年生の実力テストは目標以上の結果であった。数学検定は3級以上の生徒は24名であった。今後、感染状況によって交流や乗り入れが計画中止となりうることから、幼小中の連携をさらに密にして時機を逃さないようにしていく。中学校ではオンライン教材の活用をさらに進め、引き続き学力向上に努めていく。</p>	C	<p>・各種の検定等へのチャレンジは高く評価することができる。新型コロナウイルス感染症対策のため研修、交流等、制限がかかったため対応に苦慮されたと思う。今後ともコロナ禍における異校種交流の在り方を研究してください。(B) ・新型コロナ感染症の拡大によって、当初の計画を中断されたことにより、低い評価になったのは、残念だがしかたがないと考える。しかしながら、漢字検定受検者について高いレベルで目標達成したことや学力調査・9年生の実力テストの目標以上の結果は評価できる。今後は、全国学力・学習状況調査も評価の指標として、分析してほしいと思います。(B) ・新型コロナウィルスの拡大があり、やむを得ない評価だと思いますが、漢字検定、9年生の実力テストの結果で目標は達成できたと思います。中学校でオンライン教材の活用を進められ学力向上に努めていただきたいと思います。(B) ・校種をこえた乗り入れや、合同保育・授業が予定通り実施できなくて評価がCになるのは残念である。何か違う形で工夫されたのなら意義あると思う。昨年度は「学力向上」が1つの重点目標として大きく掲げられており「学力差の顕著な高学年においてコース別学習を設定し、学習支援を行う」とあったが、どの程度の成果を先生方は感じられたのでしょうか。数学検定3級以上35名との期待が24名という現実には厳しい。(B)</p>	B	<p>・来年度は年度初めだけでなく様々な機会にカリキュラム・マネジメントを行い、年間を通して継続的な乗り入れ保育・授業や合同保育・授業を実施する。実施にあたっては、オンラインを柔軟に活用していく。 ・実施回数だけでなく、質的な指標を設定し、上記の異校種間交流の効果を検証する。 ・コース別学習を行った結果、学力上位層については、広大附属福山高等学校への進学者が目標を上回った(20名)。また、学力中位層・下位層についても、実力テストの平均点が380点以上、実力テストの合計点が200点未満の生徒が4名以下という2つの目標を達成した。このことから、コース別学習の効果があつたと考える。来年度も、生徒の実態に合わせ、コース別学習を継続する。それに加え、漢字検定や数学検定等の外部団体の検定を活用しながら学力向上に努めていく。全国学力・学習状況調査の結果を評価指標に取り入れ、本学校園の取組を分析する。</p>
	OECD Education2030 とのつながりを意識しつつ、21世紀型資質・能力育成のモデル校をめざして本学校園ならではの視点の明確化と再構築を図り、積極的に発信していく。	<p>研究開発に取り組みることによって、21世紀型能力育成に必要な単元構成や指導方法、評価方法に関する研究力や実践力をより一層高める。</p> <p>研究開発学校として研究・実践を全国に発信するとともに、各地域からの視察を積極的に受け入れ、広域にわたって、今後求められる教育研究のありかたを発信する。</p>	<p>①「光輝(かがやき)」・教科の学習理念の確立と関連の充実 ②3次元につながる資質能力の育成を目指す保育・授業のモデル構築 ③区分内・区分間の連携の強化 ④12年間一貫カリキュラムの再構築 ⑤研究会の構成・内容の更なる見直し ⑥研究成果のプロセスと成果の発信 ⑦グローバル人材育成のためのルーブリック評価の検証</p>	<p>①該当項目に関する報告書等を作成する。 ②該当項目に関する報告書等を作成する。 ③区分内・区分間研修会を年6回以上、異校種・異学年交流を年5時間以上実施する。 ④光輝(かがやき)カリキュラムを完成させる。 ⑤わかりやすさを追求した改善を行い、研究会参加者の事後アンケートで肯定的回答を80%以上とする。 ⑥時系列に沿った研究ポートフォリオや研究日誌を作成し、発信する。 ⑦ルーブリックを用いた評価と教職員の捉え方の差の分析と報告を行う。</p>	<p>①②③はいずれも目標を達成することができた。特に③は目標を上回って研修会や交流会を実施することができた。④カリキュラムは完成できたが、わかりやすさという視点で他の学校への普及に課題があると考えている。⑤目標を上回って達成できた。次元などの用語の定義をきちんと行い、わかりやすさを追求していきたい。⑥本年度取組をはじめたが、継続的な取り組みになっていなかった。改善の余地がある。⑦幼稚園はエピソード記録を用いた評価である。幼稚園と中学校は研究を進めたが、小学校は十分に行うことができなかった。令和4年度は研究開発学校として多くの学校に成果を活用してもらえるように、簡潔でわかりやすい成果発表ができるように取り組んでいく。</p>	B	<p>・光輝カリキュラム等、21世紀型資質・能力育成のモデル校を目指した成果物を完成させた。今後は他校へいかに研究成果を普遍化させるかにも注力していただきたい。(A) ・グローバル化された多様性社会を生き抜くために、「光輝」いわゆる「躍動する感性」「レジリエンス」「横断的な知識」の3つの次元の基礎となる資質・能力を育成するために、12年間の一貫教育に取り組まれたことに敬意を表します。「躍動する感性」「レジリエンス」「横断的な知識」の3つの次元の基礎となる資質・能力とは何なのか。分かりやすく説明があると、教科との関係・結合がより明確になるのではないのでしょうか。(B) ・平成24年度よりの希望(のぞみ)に続いて、30年よりの光輝(かがやき)と、新領域の研究開発を着実に進めてきていると思う。多様性社会をたくましく生き抜いていける子供達を育てるために教科横断的なカリキュラムの試案等、成長段階に合わせて具体的な試みを実施するなど、研究開発学校としての実績を広く他の機関へと発信し、情報を共有しながら前進されていることを大いに評価する。(A) ・研究開発学校として、引き続き全国へ発信していただきたいと思います。(A)</p>	A	<p>・令和4年度は研究開発最終年度であり、研究成果を他校へ普及させるために、難解な概念の整理を中心に関わりやすさを評価指標に設定し、広く他の機関へと発信していく。 ・資質・能力育成のモデル校として幼小中連携の在り方や研究方法、ルーブリック評価等についても、発信していく。 ・実施回数の基準だけでなく、質的な指標を設定し、校内研修の効果を高める。</p>
	学習指導・生徒指導・保護者対応の具体面での充実を図る。	<p>幼小中一貫カリキュラムを実施することにより全ての教員が、幼小接続及び小中接続カリキュラム・マネジメント力を更に向上させ、校種をまたいだ子どもの見取りの仕方を学び、実践に活かす。</p>	<p>①各校種で実態に応じた研修等を行い、実践に活かしていく。 ②幼小、小中のつながりと連続性を活かした取組を進める。</p>	<p>①園内研究保育を年間4回、小中は校内授業研を年間6回以上行い、成果をまとめる。 ①(中)情報モラルや学校行事等に関してカリキュラム・マネジメント研修を年間6回以上行い、成果をまとめる。 ①(小中)いじめ防止対策委員会を定例化し、取り組みを検証・改善していく。 ①(中)あいさつやスリッパ揃えについて取り組みが向上するシステムを構築し、実践する。 ①(中)全学年の「光輝の時間」に10以上の道徳項目を扱う。 ②園児・児童・生徒理解研修をそれぞれ年間3回以上行う。</p>	<p>①小学校は計画通りに進まず6回以上できなかったが、幼稚園と中学校は達成することができた。①カリキュラム・マネジメント研修は設定した目標以上に達成することができた。①(いじめ防止対策委員会の定例化)小学校は目標を達成することができた。中学校は定例化に加え、状況に応じて開催することができた。関係生徒への指導や支援も継続できた。①管理職が中心となってその日の達成状況を報告できた。感染症対策と関連させて、朝の挨拶運動を実施できた。生徒からのあいさつがよくなっている。①(道徳項目の扱い)計画的に項目を組み込んだ学習指導ができた。②幼小中ともに計画通り実施することができた。情報共有にとどまっていることもあり、研修内容の改善が必要である。</p>	B	<p>・数値目標を設定し、それぞれの校種で取組が充実しているものになっていることが伺える。発達段階に応じた対応や成果等を見とり、広く普及していただきたい。(A) ・学習指導について、「年間何回できた」とか「年間何時間実施した」ことで目標を達成したのではなく、実施したことにより、子どもや教師にどんな力がついたのか等内容面の目標達成が大切ではないでしょうか。(C) ・学習指導・生徒指導・保護者対応、それに加えて中学の先生は部活動に関わらなくてはならないでしょう。どれほどの力量と精神的・肉体的タフさを必要とされ、忍耐強く自分の課題に日夜向き合っておられるのかと思う。先生方が熱い想いを出し合って、情報をお互い共有しながら作り上げたものを子ども達に還元してほしいと思う。(B) ・幼小中ともに計画通り実施することができたと思います。(A)</p>	B	<p>・各所属の研修会の実施について、数値目標に加え、質的な指標を設定し、子どもや教師のためになる研修会としていく。 ・研究開発カリキュラムの中の道徳の位置づけを明確にし、児童生徒の道徳的実践力が向上するように取り組む。 ・令和3年度の反省を生かし、いじめ予防のための年間指導や情報モラル指導を充実させていく。 ・小中学校では引き続き、いじめ防止対策委員会を定例化し、取組を検証・改善していく。</p>

学習指導・生徒指導の充実	<p>特別なニーズを要する子どもへの対応の充実を図る。</p>	<p>幼小中一貫カリキュラムを実施することにより全ての教員が、幼小接続及び小中接続カリキュラム・マネジメント力を更に向上させ、校種をまたいだ子どもの見取りの仕方を学び、実践に活かす。</p>	<p>①特別支援教育コーディネーターを中心に、特別支援教育委員会を機能させ、通常の学級における特別支援教育の視点を大切にした実践を進める。</p>	<p>①(幼)個別の支援計画を元に配慮事項や実践を共有し、小学校へつないでいく。 ①個々の子どもに応じた支援を行う力量を高めるために、特別支援学校教員、臨床心理士等、外部講師を招いた研修を3回以上行う。 ①(中)生徒のようすを全教職員で把握するしくみを構築・実施する。</p>	<p>①(幼)十分に達成することができた。①(幼小中)それぞれ研修を3回以上行うことができた。個々の子どもに応じた支援を考え、実施することができている。特に小学校では外部講師による研修によって児童理解がより一層深まっていた。①(中)オンラインを活用して、教職員全員で生徒の様子が把握できるようにした。通知表の所見等に活用することができた。支援が必要な子どもが増えていくことが予想されることから、通常学級での実践事例を積み上げていき、様々な状況に対応できるようにしていく。</p>	<p>B</p> <p>・オンラインを活用した教職員間での情報の共有は、とても効果的な方法だと感じる。情報共有から具体的な指導、支援につながることを期待します。(A) ・個別の支援計画を基に配慮事項や実践と変容を全教職員共有して取り組むことは、とても重要であると捉えています。そして、そのことを幼・小・中とつなげていくことが校種をまたいだみとりや指導になり、特別に配慮する児童・生徒育成に重要であり、継続して取り組んでほしいと考えます。(B) ・支援が必要な子どもが増えている現状から、様々な状況に対応できるようにしていただきたいと思えます。(B) ・「特別なニーズを要する子ども」に該当する子どもは、幼・小・中とそれぞれに状況も深刻さも違って当然である。幼い時は生活習慣や、集団生活の中での社会性など基本的なことが注目されるが高学年になると学力が問題になってくる。先生方の努力と並行して保護者側の理解と協力が重要になると思うが、子供を取りまく環境がますます複雑になる中、先生方も大変と思う。(A)</p>	<p>B</p> <p>・幼小中一貫教育校として、幼小接続、小中接続での子どもの情報の共有を確実にし、通常学級でできることとできないことを明らかにしながら、保護者と連携して子どもの育成に取り組んでいく。 ・いくつもの小学校から子どもが進学する中学校においては、出身小学校との連携を丁寧に行い、中1ギャップが小さくなるように情報共有を行っていく。 ・進学先の高等学校等との連携を丁寧に行っていく。</p>
	<p>GIGAスクールとしてのICTの更なる活用を進める。</p>	<p>グローバル化するために必要な更なる知識・技能を得て、実践に活かす。</p>	<p>①公立学校のモデルとなるようなオンラインの活用 ②学びの個別最適化を目指す。 ③GIGAスクールにおける働き方を創造する。 ④グローバル化に対応した生徒や教職員の資質・能力の向上を目指す。</p>	<p>①(中)オンラインの活用事例の交流と事例集の作成を行う。 ②(中)ICTを用いて特別な支援を必要とする生徒への学びの保障(学習計画表の作成等)を行う。 ③(中)起案や出席簿、学習計画表の電子化を行い、活用していく。 ④(中)英検準2級以上の資格を持つ生徒の数を全校で45人以上にする。 学校として海外との交流・受け入れを5回以上とする。 教育実習生が教科横断型の授業実習または、英語以外の教科で英語による授業を実習期間中に10回以上実施する。</p>	<p>①(中、オンラインの活用事例)事例集が令和3年10月に完成した。②(中、学びの支援)個別の事例に対応しながら、実施することができた。本年度の実施を評価し、来年度にむけて改善していく。③(中、電子化)様々な業務の電子化と共同作業を可能にし、業務改善につなげることができた。④(中、英検)45人以上にはならなかった。(幼小中、海外交流)現状では実施できなかった。(小中、教育実習)中学校では教科横断型の実習が目標以上に実施できた。英語で行う実習は目標を達成できなかった。中学校では令和2年度からの取組によってオンラインの活用が大幅に進んだ。小学校と連携し、学校園でのオンライン化を進めるとともに、他の学校への普及を図っていく。</p>	<p>B</p> <p>・コロナ禍の中なので、交流などの行事については、厳しい状況である。オンラインの活用事例については、公立学校のモデルになるので、広く普及させていきたい。(A) ・三原市内小・中でもGIGAスクール構想に基づいて、授業において「どんな活用をしたか」から「どんな学びにつながったか」にシフトを移しつつあります。そのことは、ICTを「主体的・対話的で深い学び」にどのように活用するかが課題になっております。また、コロナ禍において学級閉鎖などが起こっております。そこで、広大附属三原では、オンライン活用事例集が完成したと明記されておりますので、是非公立学校にも情報をいただければありがたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。(B) ・新型コロナウイルスの拡大のため、やむを得ない事態だと思います。学校園でのオンライン化を進め、他の学校への普及を図っていただきたいと思えます。(E) ・実際問題として、オンラインの授業風景や内容がどのようなものか分からないので自己評価を参考にしてBとする。生徒の中には先生方より電子機器に詳しい子どもや、その道に進みたいと今から技能を身につけている子どももいると思う。頼もしい子ども達である。オンラインが導入されて、教室の学習風景や、生徒の習熟度が望ましい形になることを願っている。英検準2級45人以上はクリアしてほしい。(B)</p>	<p>B</p> <p>・オンライン活用事例集にどんな学びにつながったかという視点を加え、多くの学校に利用してもらえるように改訂していく。 ・年度内に新しい活用が増えていった状況があり、それに対応できない教職員も多かった。令和4年度は活用場面を整理し、学習指導だけでなく校務においても活用をさらに推進していく。 ・高度なスキルを持っている子どもも多くいることから、彼らのニーズに答えられるような学習指導の在り方を検討し、実施していく。また、情報モラルやネットリテラシーについて引き続き指導していく。</p>
	<p>学校及び教室の掲示物について工夫し、環境づくりに努めていく。</p>	<p>幼小中一貫カリキュラムを実施することにより全ての教員が、幼小接続及び小中接続カリキュラム・マネジメント力を更に向上させ、校種をまたいだ子どもの見取りの仕方を学び、実践に活かす。</p>	<p>①学級経営・教科経営等が見える教室経営を行う。</p>	<p>①保育室、教室や校園内に子どもたちの作品の掲示を計画的に行う。 ①(小中)「見方・考え方」・メタ認知の育成にいかすために学習内容・学び方・考え方が見える掲示を子どもたちと共に作成する。 ①(中)生徒の活動のようすや考えたことを視覚的にまとめ、校内のモニターに提示する。また、学級経営や教科経営を教室のモニターを用いて計画的に提示する。</p>	<p>①(幼小中)幼稚園・小学校は目標を上回って達成できた。中学校は掲示が更新されないこともあり、改善が必要である。①(小中、見方・考え方)大学の評価委員の方に一定の評価してもらうことができた。今後とも工夫が必要である。①(中、モニター)昨年度よりも活用回数が増えた。しかし、計画的に運用されておらず、生徒会活動の関与も含め、改善が必要である。</p>	<p>C</p> <p>・公立学校においても中学校の環境づくりが大きな課題である。生徒会も巻き込み、生徒の主体的、自主的な表現活動が掲示物となって学習の成果が見られるようになることを期待します。(B) ・授業参観や授業観察の機会がない中でどのよう解答してよいのか困惑していますが、生徒の活動の様子や考えなどを視覚的にまとめて、校内モニターに提示することなどは、今からの教室環境づくりの範疇に入る新しい考え方ではないかと参考になりました。(E) ・『7才～10才くらいより人間は日常の活動の繰り返しを通して自分を客観的に見ることができる能力を身につけることができる』という知見がある。「メタ認知」は生まれながらに持っている能力ではないからこそ、授業では補えない部分を掲示板やモニターなどの、ふとした時に視界に入ることばや展示物などから学んでいくのであろう。(B)</p>	<p>B</p> <p>・それぞれの校種の特徴を生かし、引き続き校内及び教室の掲示物を工夫し、環境づくりに努めていく。小中学校では研究開発カリキュラムにおける学び方や考え方がわかる掲示物を子どもたちを巻き込みながら作成していく。特に、中学校では生徒会活動を踏まえ、子どもの主体的で自主的な表現活動の場になるように指導していく。</p>

働き方改革の推進	個人及び組織の目標を定めて運動させながら、管理職との協力・協働の関係を軸として、より一層の取り組みを進め、勤務時間の縮減を図り、公立学校のモデルケースとなるように推進していく。	(該当の項目なし)	①働き方改革の意義・目的等について、構成員の入れ替わりに合わせて計画的に研修を行う。 ②幼・小・中の目標と、個人の目標を連動させ、計画的な勤務時間の管理を行う。 ③コロナ禍での実践や、新たな生活様式を勘案し、行事等のあり方を模索し、働き方改革につなげていく。 ④校務の電子化とその共有化を推進する。	①幼小中のそれぞれの職場や安全衛生委員会で働き方改革の意義・目的等について計画的に研修する。 ②業務改善の取組案を各自が設定すること、一斉退勤日の確実な履行と年休の計画的な取得を通して、教職員一人ひとりが時間外労働時間を前年度比10%削減を目指す。 ③(中)校務分掌上の主任は年5つ以上の業務改善または推進を提案、実施する。 ④(中)出席簿と生徒の生活記録を電子化し、教職員の負担感を昨年度比20%減を目指す。 ④電気料金及び紙の使用量を前年比10%削減を目指す。	①(幼小中)それぞれの職場で働き方改革の意義等について、計画的な研修は実施できず、管理職からの説明にとどまった。(安全衛生委員会)10月からメンタルヘルスを中心にワークライフバランスについて研修を進めていった。令和4年度は年間計画を作成し、推進する必要がある。②(幼小中)幼稚園は時間外労働時間が少なく、業務改善が進んでいる。小学校は時間外労働時間の削減が十分でなかった。中学校は昨年度の在籍者9名のうち7名が目標を達成することができた。令和4年度は一斉退勤日とともに計画年休の取組を強化し、時間外労働時間の削減に努めていく。③(中)業務のオンライン化を中心に、業務改善を提案するとともに、従来の取組をより良くする提案(道德掲示板、いじめアンケートのオンライン化、教科横断型の教育実習等)も多かった。④(中)負担感の昨年度比20%削減は、達成することができなかった。④達成できなかった。特に、電気料金は感染症対策のため、エアコン稼働中も換気をしていたため、使用量の警報が何度もなっていました。働き方改革に取り組んでいるものの、教科指導や生徒指導の業務の削減ができておらず、受け持ちによって時間外労働時間が増えってしまう教員もいた。エネルギーや資源の使用量を減らすことは十分ではなかったが、令和4年度も目標に設定していく。	C ・研究開発校として、業務改善や時間外労働時間の削減がどれほど困難なことかは容易に想像がつく。しかしながら、働き方改革の意義・目的については、管理職のみならず、全ての職員がタイムマネジメントを意識した働き方の工夫に取り組む必要がある。(B) ・本市の公立学校では、校務支援システムの活用やクロームブック活用による業務の軽減・コロナ禍において、学校行事の精選、内容の工夫・中学校での時程の工夫(5時間授業してクラブ活動1校実施)などに取り組んでいます。働き方改革の推進について、情報交換が可能であれば良いと考えます。(E) ・今年は何に於ても感染予防が最優先され、さまざまな活動が制限された中で、今まで以上に効果的な教育活動を心がけられたと思う。業務改善の取組を見直すことでできる限りの負担軽減をし、先生方には心身共に元気で子ども達に向き合う余裕を持っていただきたい。そのためには極力時間外労働時間の削減は必要である。(B) ・今年は何に於ても感染予防が最優先され、さまざまな活動が制限された中で、今まで以上に効果的な教育活動を心がけられたと思う。業務改善の取組を見直すことでできる限りの負担軽減をし、先生方には心身共に元気で子ども達に向き合う余裕を持っていただきたい。そのためには極力時間外労働時間の削減は必要である。(B) ・引き続き、働き方改革に取り組んでいただきたいと思います。(B)	B ・幼小中の目標と個人の目標を連動させることで、時間外労働時間の削減に一定の効果があった。しかし、校務分掌で担う業務量にばらつきがあったり、生徒指導が集中したりして、小中では多くの教職員について目標とする月42時間以内の時間外労働時間が達成できなかった。校種ごとの研修会を行うとともに校内安全衛生委員会で研修内容の検証等を行っていく。また、年休の計画的な取得を本年度以上に進めていく。 ・電気料金及び紙の使用量の削減については、環境保全や経費削減の観点から、引き続き目標に設定し、取り組んでいく。
	防災・減災に関する地域との連携を強化する。		①三原市内の保育施設、幼稚園との連携を強化し、三原市危機管理課の指導・助言を受けながら、防災に関する取組を推進する。	①三原市内保育施設・幼稚園関係者を対象とした研修を実施する。	①(幼)達成することができなかった。来年度も継続して実施する。	D ・防災に対する危機管理は重要です。幼稚園における防災訓練や職員の研修は、子どもが若年であるがため必要と考えます。来年度の計画をよろしくお願いたします。(C) ・感染拡大のため、仕方がないと思います。(D) ・研修が中止となったために「D評価」は仕方ない。ただ、表では保育施設、幼稚園関係者を対象とした研修となっているが、小、中の関係者対象は予定されていなかったのでしょうか。ここ数年、「想定外」ということばが通じないくらい大規模な災害が次々に起きてきたし、三原の人達も経験し怖さも知っている。「自分の生命を守る行動」ということばを浸透させ、地域との連携のさらなる強化が必要。(D)	D ・三原市内の幼稚園の拠点として、新型コロナウイルス感染症の拡大状況等、社会の状況に応じて、工夫しながら、研修を計画、実施する。 ・三原市内の小中学校及び中学校関係者を対象とした防災・減災に関する研修については、今後検討していく。
地域連携・地域貢献	地域で活躍できる人材の育成を図る。	広域にわたる地域貢献拠点校として、近隣の学校や地域への貢献・連携 各教育委員会等との連携を強化し、情報交換を積極的に行い、研修の場を設定することによって、地域の教育力向上に寄与する拠点校となる。 研究開発学校として研究・実践を全国に発信するとともに、各地域からの視察を積極的に受け入れ、広域にわたって、今後求められる教育研究のありかたを発信する。	①キャリア教育及び地域学習を効果的に位置づけ、実践する。 ②次世代の教育を担う教職員の養成を充実する。	①(小)第3学年で「やっさ祭り」に関する学習を行い、祭りに対する地域の人々の思いや取組にふれることで、地域への関心を抱くことができるようにする。 (中)三原市と連携し、市内の企業で働く人へのインタビューを行い、勤労観や郷土愛に関して肯定的評価80%を目指す。また、昨年度開発した「三原学」を7年生の探究学習で実践し、勤労観や郷土愛に関して肯定的評価80%を目指す。 ②教育実習生の実習指導に関する満足度の肯定的回答を90%以上を目指す。	①(小)外部講師を招いて学習を進めることで、子どもたちの地域への関心を大幅に高めることができた。①(中)三原市が作成したハンドブックを活用し、勤労観や郷土愛に関して肯定的な評価をする生徒が90%を超えた。三原学の学習の効果は単元が終わっていないため、分析できていない。②(幼小中)幼稚園、小学校、中学校ともに実習指導に関する満足度の肯定的回答は90%を超えていた。コロナ禍にあっても満足できる結果を得られたことから、今後も可能な限り地域教材を用いて学習を進めていく。また、実習校として新しい教育課題に対応できる教員の育成を目指して、質を高める工夫を行っていく。	B ・地域から通う児童生徒が地域を担う人材であるといった観点から地域貢献に視点を置いたキャリア教育が進められている。(A) ・地域に愛着を持ち、将来地域で活躍できる人材育成のためには、地域を知ることから始まると考えます。その中で、課題や問題を見つけ、解決していこうとする過程を通すことが重要と考えます。是非とも開発された「三原学」を7年生の探究学習での実践を充実させてください。(B) ・コロナ禍にあっても満足度の肯定的回答が90%を超えていたのは素晴らしいことと思います。三原への郷土愛、地域愛を育てて頂きたいと思います。(B) ・2年続けてやっさ踊りや神明市が中止になったことは、どうしても町全体の活気に影を落としたことである。しかし、学習としての取組はハンドブックの活用や、ユニークな「三原学」というテーマで学ぶことによって、新たな気づきもあり、子ども達が郷土にだけ込む大変よい機会になったと思う。自分達の生まれ育った街が大人になっても好きと言える。そんな三原の子たちであってほしい。(B)	B ・来年度も引き続き、地域資源の活用を図りながら研究開発を行い、子どもの郷土愛を高めたり、のぞましい勤労観が形成されるように指導していく。 ・来年度も教育実習生に対してICT機器の活用や教科横断型の授業の指導等を継続して行い、次世代の教職員に必要な情報機器活用能力やカリキュラム・マネジメント能力等の育成を図っていく。
	近隣の学校や地域への社会貢献・連携を具体化する。		①文部科学省、教大協、全附連や中附連等に幼小中一貫の研究を広く発信する。 ②学会発表や学会誌原著論文、出版物等によって学内外に発信する。 ③授業づくり研修会(CCL)、公開研究会等の地域貢献の研究会の実施 ④教育委員会主催の研修会や公立学校等での指導助言者の役割を果たす。 ⑤県内・市内の乳幼児教育の拠点としての機能を果たす。 ⑥子育て支援の取組を継続する。	①研究成果を同じ校区にある小中学校に還元するとともに、研究主任を中心とした人的交流を行う。教育分野での三原市との連携を1件以上行う。 ②教職員一人一人が研究開発にかかわる光輝または、教科の実践を行い、1事例以上報告する。また、学会での口頭発表や論文発表を年4回以上行う。 ③CCLや公開研究会への参加者の満足度の肯定的回答を90%以上とする。 ④県内の学校園の校内研修等の講師を積極的に受け入れる。また、人事交流派遣教員の研修プランを作成し、人材育成を行う。 ⑤(幼)県内・市内の保育・幼児教育関係の組織団体の事務局として組織の運営・研修会の企画等を行う。 ⑥(幼)園庭開放を年2回実施する。未就園児親子を対象とした子育て支援「すこやかランド」を月1回(年間11回)実施する。	①同じ校区にある小学校と高校とは、研究主任が研究内容の交流を行った。感染状況が悪化したため、年度の後半は交流ができなかった。教育分野の連携は小、中学校が1件以上行うことができた。②研究開発に関わる事例報告は全員することができた。学会発表は小学校教員が目標を達成することができた。③(CCL)目標を達成することができた。(公開研究会)目標を達成することができなかった。④幼稚園、小学校では達成することができなかった。中学校では人事交流派遣教員の研修プランを作成し、計画的に実行することができた。⑤(幼)計画通り、実施することができた。⑥(幼)新型コロナウイルス感染症の拡大時期以外は計画通りに実施することができた。コロナ禍にあっても地域貢献を進めることができた。公開研究会への参加者の肯定的回答が高まるようにわかりやすい研究を目指していく。	B ・コロナ禍の中、目標は達成できなくても、研究内容の発信は例年通りできていると感じます。(B) ・コロナ禍において、近隣の学校や地域への貢献・連携ができなかったことは、やむをえないことではありますが、今後も先進的な研究を三原市内の公立学校にも広めていただきたいと思います。また、幼小中一貫教育を始めた学校もありますので、そのノウハウをご教授していただきたいと考えております。のちほど、連絡いたしますので、よろしくお願いたします。(B) ・コロナ禍にあっても、地域貢献を進めることができたと思えます。(A) ・地域貢献拠点校として、また研究開発学校としての責任と使命の元、各方面からの期待に応えるために、国や大学、また他の附属学校や各教育委員会等と連携し情報を共有しながら地域の教育力向上に大いに寄与されていることは十分評価できる。コロナ禍にあっても精力的に活動されたことが伝わります。Aに近いBであると思う。(B)	B ・令和4年度は研究開発最終年である。わかりやすい発信を評価指標に設定し、研究成果を活用してもらえるよう努力する。また、日本生活科・総合学習指導学会で発表担当にもなっている。学会発表では地域の学校との連携が必要であるため、本年度以上の交流を計画している。幼小中とも教職員個人の研究成果の発信はこれまで通り行うとともに、学校園として全国の教育関係者の視察の受け入れや研修会への講師派遣等を積極的に行っていく。